

## 総合文化研究所シンポジウム

### The Joy of Translation?

柴田元幸（アメリカ文学）、松永美穂（ドイツ文学）、野崎歓（フランス文学）、沼野恭子（ロシア文学）、和田忠彦（イタリア文学）という錚々たる顔ぶれの翻訳者・研究者を登壇者として迎えたシンポジウムは、これで三回目となる。過去二回は、「翻訳という創造空間」（二〇一七年）、「欧米文学から見る日本翻訳史」（二〇一八年）というテーマでシンポジウムを行ってきたが、それらはトランスレーション・スタディーズにおける論議をかなり意識したものだ。今回の「The Joy of Translation?」というテーマは、せつかくこれだけの人たちが一堂に会しているのだから、それぞれ翻訳の楽しさについて肩の力を抜いてわりと気楽にお話しをしていただきたい、という気持ちもともとあつて考えられたものだった。しかし、最後につけられたクエスチョンマークはもちろん修辭疑問を表している。単純に「翻訳は楽しい！」といえないのは、翻訳はほんとうにたいへんな作業だという実際上の事情だけではなく（それはむしろ気軽な話に属することかもしれない）、翻訳という仕事が置かれている文化的・社会的コンテクストを想定してのことである。日本では「翻訳」のもつ社会的・文化的意義、またそれにもなつて翻訳者の文化的位置づけが、欧米と比べてかなり高い。とりわけ英語圏では、翻訳理論家のヴェヌーティが指摘してきたよう

### 報告 山口裕之

に、できるだけ自然に読める翻訳を生み出すことが求められる翻訳者は、原作と翻訳テクストのあいだで、いわば黒子のように「目に見えない (invisible)」存在となる。（こういった論点に関わってくる以上、今回のテーマも結局は、トランスレーション・スタディーズで議論されている問題と密接に関わっている。）

翻訳者の社会的・文化的位置づけ、経済的に不利益な立場を念頭に置くならば、翻訳は「楽しさ」からはほど遠いものにも思える。しかし、この日、登壇していただいたパネラーたちの圧倒的な量の翻訳の数々を目にするとき、この人たちは翻訳へと駆り立てている力はいったい何なのかと問わずにはいられない。そこにはやはり翻訳のもつ大きな魅力が存在するのではないか。それを語っていたことが、このシンポジウムの素朴な狙いなのだが、しかしそれは、一度、修辭疑問による否定という迂回を経ることによって初めて可能になるものかもしれないという思いが、このクエスチョンマークには込められていた。

最初の講演者である柴田元幸氏は、このシンポジウムのタイトルに直接関わっている、アメリカの作家・翻訳者エリオット・ワインバーガーのいくつかの言葉をまず引き合いに出して話を始めた。「翻訳は新しい音楽を生み出す。」しかし、真の翻訳

とはどのようなものかをワインバーガーはポジティブに語りながらも、「翻訳の楽しさ」など語ることはできないとも言う。それは日本では存在するかもしれないけれど、欧米ではない、ということ柴田氏は確認してゆく。その前提となっているのは、欧米での翻訳者の地位の低さである。

そこには、翻訳とはつねに「正しい」ものであるはずだという基本的な考え方も関わっていると柴田氏は指摘する。翻訳は正しいものであるはずだという前提自体が間違っている。「作家としては、私は「まずい」ということはありうるとしても、「間違っている」ということはありえない。「よい」翻訳者はあるかもしれないが、「正しい」翻訳者など決してありえない。」(David Mitchell)

それでは、どのような翻訳が「よい」翻訳なのか。柴田氏は、原文を読んだときの快楽を伝えるものこそが「よい」翻訳であると主張する。その例として、柴田氏は最後に、ラフカディオ・ハーンの「むじな」を、英語と自らの翻訳で朗読した。英語のテキストは、ハーンの原文ではなく、柴田氏が英語の素朴な美しさをより強く感じる、中学校の英語の教科書にかつて収録されたものである。その場にいた誰もが、柴田氏によって生み出された「声」と、翻訳の言葉のもつ力から、強い感銘を受けることになった。

二人目の発表者、ロシア文学の沼野恭子氏は、翻訳の困難さにむしろ焦点を当て、翻訳における文化的差異が如実に浮かび上がる例を二つとりあげた。沼野氏が最初に示したのは、自ら翻訳したボリス・アクーニンの『墮天使殺人事件』のなかに登場するさまざまな「馬車」をどのように訳すかという問題であ

る。ロシアの馬車文化においては、さまざまな馬車の種類がそれぞれ重要な文化的コノテーションをもつ。しかし、日本語ではそれらはすべて「馬車」という一まとめの概念として言い表されているものである。沼野氏自身は、説明的な言葉とルビとのコンビネーションによってそれに対応していたのだが、翻訳の困難さの一つの例として語られた。

それとはいくぶん異なる例として、ロシア語と日本語のあいだでの概念の対応の難しさについても言及された。沼野氏がりあげたのはアレクシエーヴィチの『セカンドハンドの時代』の序文「共犯者の覚え書き」のタイトルに含まれる「共犯者」という言葉である。それに対応するロシア語が、単に「共犯者」という意味を越えて、どのようなニュアンスが重ね合わされているのかに沼野氏は着目した。

最後に、ロシア語と日本語の対訳による朗読が行われた。東京外国語大学出版会から出版されたばかりの、ブロッキーの詩による絵本『ちいさなタグボートのバラード』である。ロシア語は、大学院生のマリア・プロホロワさん、そして日本語は翻訳者である沼野恭子氏自身による朗読。ここでも、その朗読の「声」が会場を満たすことになった。

三番目にお話いただいた野崎欽氏は、翻訳が楽しいのは、翻訳を開始する瞬間と終わる瞬間だけで、あとはひたすら苦しい作業だと話して会場の笑いを誘ったあと、会話における女性の言葉をもどるように翻訳するかという問題について、いくつかの具体例をあげながら話を進めていった。翻訳家としても重要な仕事を残している井伏鱒二には、直訳調と出身地である広島という言葉の興味深い混淆状態が見られるが、同じく大学でフラン

ス文学を専攻した大江健三郎（愛媛出身）にも似たような傾向があることを野崎氏は指摘する。

ついで、野崎氏にとって最初の翻訳であったジャン＝フィリップ・トゥーサンの『浴室』において、地の文からいかに「声」を掬い上げるかということ为例として、翻訳における会話の扱いの難しさについて話が及んだ。とりわけ、女性の「声」が難しいということを野崎氏はあらためて強調し、金水敏のいう「ヴァーチャル日本語」も使わざるをえない状況があると述べて、翻訳小説の中にしか存在しない表現も紹介した。

四番目のパネラーとして発表した松永美穂氏は、翻訳家助成の制度である「ヨーロッパ翻訳者コレgium」について紹介を行なった。オランダとの国境近くの街、シュトラレーンにあるヨーロッパ翻訳コレgiumは、世界で最初に設立された最大規模の国際的な翻訳助成組織である。ここでは、一年間に六十カ国、三百人もの翻訳者たちが助成を受けて滞在し、翻訳に集中する。また、希望に応じて互いの交流を深めることもできる。松永氏は、この素晴らしい設備の整った機関での自分自身の滞在の様子を数多くの写真とともに紹介し、そこでの翻訳者同士の交流はまさに「翻訳の喜び」であると強調した。

このように異なる言語と文化が際限なく混じり合う場では、「オリジナル」という概念が消滅するような「複合言語」の翻訳の場も生じることがある。松永氏は、その例としてウィーン出身のユダヤ人女性活動家ベルタ・パッペンハイムに見られるドイツ語と英語が分かち難く混じり合う言葉などもとりあげ、複合言語によって、軽やかに遊ぶ言語の新しい可能性が開ける視点を提示した。

最後の発表者となる和田忠彦氏がテーマとしたのは、翻訳するテキスト相互のあいだに存在する参照関係を、自分の翻訳のなかでどう扱うか、さらにはどのように乗り越えるか、というきわめて高度なレベルでの「翻訳の楽しみ」である。マンゾーニの『いいなづけ』がエーコにとっていわば憧れのテキストであり、エーコは『文体練習』のなかでそれに向き合うことになったが、和田氏は『文体練習』を翻訳したときには、『いいなづけ』の引用部分については平川祐弘氏の既訳を借用した。和田氏にとって、『小説の森散策』はいわばその「リベンジ」であったという。

マンゾーニに対する憧れは、アミーチスの『クオーレ』のうちにも顕著に現れていることを和田氏は指摘するが、自分自身が『クオーレ』を翻訳するときに、それを取り込みつつどう翻訳するかという挑戦も生まれる。原作者による先行テキストの参照とともに、そこには翻訳者による先行テキストの参照がある。これらは、翻訳者にしかできない遊びでもある。

シンポジウム全体を通じて、発表者によってかなり異なる側面から「翻訳の喜び」あるいはその裏返しとしての「苦しみ」について、きわめて具体的なテキストや状況が語られたことは、聴衆にとって非常に刺激的でさらに大きな興味をかき立てるものとなった。言語圏の異なる五人の翻訳者・研究者による講演は、「The Joy of Translation?」というテーマに単線的に収束していくものでは決してなかったとはいえ、そこにはいくつかの重要な共通する論点も含まれていたように思われる。一つは、「声」のもつ生々しい力が翻訳において強力に作用しているということである。二つ目は、翻訳における「遊び」。それ

はもちろん翻訳者にとつての「喜び」であるとともに、翻訳の  
もつ創造性と結びついている。そして、三つ目は、翻訳という  
行為においては当たり前のことではあるのだが、文化において  
も言語においても横断的であることこそが、何よりも喜びを生  
み出す大きな原動力であると言えるかもしれない。三年にわた  
り毎年開催されてきたこの翻訳者シンポジウムは、三時間を超  
える長さに見合った充足感とともに終了を迎えた。

主催：東京外国語大学総合文化研究所

日時：二〇一九年十月二十三日（水）

場所：東京外国語大学 研究講義棟二二六

パネリスト：

柴田元幸（東京大学名誉教授・アメリカ文学）

野崎 歓（放送大学、東京大学名誉教授・フランス文学）

松永美穂（早稲田大学・ドイツ文学）

沼野恭子（東京外国語大学・ロシア文学）

和田忠彦（東京外国語大学名誉教授・イタリア文学）

司会：山口裕之（東京外国語大学・ドイツ文学）